

# 「胡頹子盜人」を読む

## —— 牧歌的な作品——の要旨

張月環

### 日文摘要

この作品「胡頹子盜人」について、一部の評論家は朝鮮飴の記述をもとに、川端が差別問題をどう取り込んでいるかという点に論を集中させているが、本論文は朝鮮飴についての論説を省いた上で、別の視点で考えてみたもので133ある。

「胡頹子盜人」はほぼ同じ字数による二つの話から成っており、前半は小料理屋の女と郵便配達夫との会話を綴ったもの、後半は炭焼きの娘が胡頹子を持って、村の医者へお礼に行く話であるが、小料理屋の女と炭焼きの娘の二人の出会いは胡頹子によって繋がれている。

本論文では、1.お金と胡頹子 2.小料理屋の女と炭焼きの娘 3.「胡頹子盜人」という題名等の三つの側面を通して、何故、この作品が「胡頹子盜人」と名付けられたのか、そこに現されている川端の心情について明らかにする。

日文關鍵字：胡頹子；朝鮮飴；小料理屋の女；炭焼の娘；お金

# 「茱萸盜者」

## ——牧歌作品——要旨

張月環

### 中文摘要

關於川端康成「茱萸盜者」作品，一般的評論家大都以文中的〈朝鮮糖果〉著手，論述集中在川端對人與人之間差別問題的看法；本論文略去〈朝鮮糖果〉的說法，試以別的觀點談論這篇作品。

「茱萸盜者」由兩篇小節文章所構成。前小節主要是小料理店的女人與郵差之間的會話，後小節則是燒木炭的女孩手持茱萸往村莊的醫師家致謝時，途中所發生的事情。小料理店的女人與燒木炭女孩因茱萸的緣故而結識，兩小節的字數幾乎一樣，為何川端康成以「茱萸盜者」題名？

本稿以下列三點論述此作品：1.金錢與茱萸；2.小料理店的女人與燒木炭的女孩；3.「茱萸盜者」的題名。透過這三點論述，藉此來說明作者寫這篇小說的心境。

**中文關鍵字：**茱萸、朝鮮糖果、小料理店的女人、燒木炭的女孩、金錢

# Abstract of Reading “The Cornel Stealer”

## -Pastoral Works-

Jane, Ywe-Hwan

### Abstract

Regarding to Kawabata Yasunari’s prose, The Cornel Stealer, many commentators focus, in the context, on “Korean candy”, in which the author’s view about the diversity of characters and cultures of people have been windly discussed. In this paper , however, we omit such a perspective and intend to explore other point of view.

“The Cornel Stealer” is composed of two sections. The first section is mainly about the conversations between the woman who run an eatery and the postman. The second section is about what happened on the way when the girl who burned charcoal, the way to produce wood coal, sent the cornel and wood coal to thank to the doctor in the village. While the value and the number of word in the two respective sections are about on a par, why did the author choose to give “The Cornel Stealer” as the title of this prose ?

The following three key points are going to be discussed in this paper: 1. Money and cornel, 2. The woman and the girl, 3. The title “The Cornel Stealer”

**Keywords: cornel, Korean candy, the woman who run an eatery, the girl who burned charcoal, money**

この「胡頹子盗人」という作品については、森本穫の「川端康成における差別意識の構造—「伊豆の踊子」と初期「掌の小説」を中心に—<sup>1</sup>をはじめとした一部の評論家が朝鮮飴の記述をもとに、川端が差別問題をどう取り込んでいるかという点に論を集中させているが、本論文は朝鮮飴についての論説を省いた上で、別の視点で考えてみたいと思う。

## 一、はじめに

「胡頹子盗人」は大正十四年十二月号の「文芸春秋」に「第三短篇集」と題して、「有難う」、「万歳」、「玉台」とともに発表された。これについて、川端自身は「胡頹子盗人」もつくりごと、「有難う」、「万歳」などと共に、これらはいくらか牧歌的であると『独影自命』<sup>2</sup>で述べている。当時彼は26歳で、この年から昭和二年にかけて、伊豆湯ヶ島に長く滞在していた<sup>3</sup>。

四篇のうち「有難う」と「胡頹子盗人」は、作品の冒頭と文末の表現描写が一致しており、興味深い。「有難う」では「今年は柿の豊年で山の秋が美しい。」という文から物語が展開し、文末もこの表現で締め括られる。同じく、「胡頹子盗人」も「風さやさやと／秋を吹く」という表現が冒頭と文末で使われている。

本論文では、「胡頹子盗人」を書く川端の心情について作品を分析しながら、作品の本質を明らかにしたい。また、「胡頹子盗人」はほぼ同じ字数から成る二つの話から構成されている作品である。前半は小料理屋の女と郵便配達夫との会話を綴ったもので、後半は炭焼きの娘が胡頹子を持って、村の

<sup>1</sup> 森本穫（1989年4月）『孤児漂白—川端康成の世界—』 林道社 ここでは羽鳥徹哉原善 編著（1998年6月）『川端康成全作品研究事典』p129 勉誠出版社 吉田秀樹の「研究展望」を参照。

<sup>2</sup> 「独影自命」は『川端康成全集』第33巻に収録。p465 本論文では『川端康成全集』全35巻補巻（新潮社 1980年2月—1984年5月）漢字の旧字体は新字体に改めた。なお「胡頹子盗人」は全集の第1巻である。

<sup>3</sup> 中村光夫 小林秀雄等 編著（新装版1984年3月 新装再版 1989年7月）『文芸読本 川端康成』p250 河出書房新社 羽鳥徹哉の「川端康成年譜」を参照。

医者へお礼に行く話である。それは小料理屋の女と炭焼きの娘の二人の出会いにおける胡頹子によって繋がっているが、何故、「胡頹子盗人」と名付けられたのか、これも合わせて考えてみたいと思う。

以下、「胡頹子盗人」を1.お金と胡頹子 2.小料理屋の女と炭焼きの娘 3.「胡頹子盗人」という題名という三つの側面から論じることとする。

## 二、お金と胡頹子

前半はお金を中心として書かれた話であると共に、郵便配達夫の女に対する愛情の一面が表わされている。次の会話を引用しながら説明する。

「(略)私やお前さんに大分貸しがあるんだよ。お前さんが大臣でもなつたら色文に限り切手無用といふ法律を出すんだらうが、今はさうはゆかないよ。(略)自分の手紙を、へえ郵便つて配達するんだからね。罰金をお出し。切手代を貰ひたいね。私小遣ひがないんだ。」

「声が高い。」

「おしつたら。」

「しやうがないなあ。」と彼はポケットから銀貨を一枚縁側へ捨てる。そして、革カバンの紐を手繰りよせて伸びをしながら立ち上がる。

この会話では郵便配達夫は女に惚れ、切手を貼っていない手紙をよく女に渡すことが分かる。女が郵便配達夫に切手代としてお金を要求し、配達夫も言う通りに従い、銀貨を一枚縁側へ捨てる。その銀貨が当時どのぐらいの価値があったかについて、森晴雄の「胡頹子盗人——『伊豆の娘』に触れつつ」<sup>4</sup>にこのような説明がある。

<sup>4</sup> 森晴雄(2012年3月)『川端康成「掌の小説」論「有難う」その他』p171 龍書房。

「銀貨を一枚」、五十銭を投げ与える。当時の郵便料金は手紙が十五グラムまでが三銭、葉書が一銭五厘だから、多すぎるように思えるが、口止め料兼好きな女への小遣いのつもりで上げたのだろう。

まさにこの通りだと思う。五十銭の金を上げるのは、郵便配達夫が女に対して情があることの表れである。そうでなければ、そのような気前のよさはないと思われる。

前半では金で物事が解決されるが、後半では胡頹子がお礼として登場する。炭焼きの娘が炭俵を背負って山を下りて来るが、炭のほかに胡頹子を持って村の医者へお礼に行くのである。次は娘が山を下りる前の、父と娘の会話である。

「炭だけでええかなあ？」と彼女は炭焼小屋を出る時、病床の父親に言った。

「炭の外には何もありませんて、言うどけ。」

「父さんの焼いた炭ならええけど、俺が焼いた炭やもの、恥かしいわ。父さんが起きて炭を焼くまで待たうか。」

「それぢや、どこかの山で柿でも貰つて行け。」

「そんならさうしよう。」

父はどこかの山で柿でももらって行けと言ったが、柿は自然になっているものならよいが、人間が植えたものなら、お金を払わなければならない。「しかし、娘は柿が盗めないうちに、稲田のあるところまで下りて来てしまった。田の畦の胡頹子の鮮やかな赤が彼女の眼から盗心の憂鬱を吹き払ってしまった。」（「胡頹子盗人」）胡頹子は自然なものだが、医者は柿より安く思ってしまうであろう。ここは前半と同じように貧しい人間が描かれているが、お金がないため、ここでは炭、柿、胡頹子という自然のものをお金の代わりにお礼として医者に渡すという状況が書かれている。

胡頹子は柿ほどの値打ちはないが、娘がお礼として医者にとって行く途中で、案外、人に喜びを与えるものとなる。まず、娘はにこにこ笑いながら、胡頹子をぽつりぽつり口に入れて村へ下りて行くという描写がある。次に、小学校の女の子が帰り道で「おくれ」、「おくれ」とせがむ場面もある。ここでも、娘はにこにこ笑いながら珊瑚樹のような枝を黙って突き出す。また、この胡頹子は娘と小料理屋の女との出会いのきっかけとなる。炭焼きの娘と小料理屋の女の間には、次のような会話が交わされる。

娘は村にはいった。小料理屋の縁側に女がゐる。

「まあ、綺麗。それ胡頹子なのね——。どちらへ。」

「お医者さんまで。」

「こなひだ山かごでお医者さんを迎へに来たのはあんたどこ？」

——赤い朝鮮飴より綺麗ね。一粒頂戴。」

娘は一粒あげるだけではなく、胡頹子の枝が女の膝に乗ると手を離してしまった。そして、女はこの娘の動作を意外に喜びながら、半信半疑に聞く。

「これをいただいてもいいんですか」

「いい。」

「枝ごとみんな？」

「いい。」

女は驚きながらも、とても喜んでいて。そのため、結末では「女は珊瑚樹の蔭の帯から銀貨を出して紙に包み、静かに坐つたまま炭焼き娘の帰り路を待つてゐる」という描写が描かれている。もし、娘がぐみを持っていなかったなら、こんなうれしい出会いはなかっただろう。お金より、胡頹子がもたらした喜びの方が大きい点において、前半と後半は非常に対象的なのである。さらに、胡頹子には隠されている意味がある。「女は（略）一粒口に入れた。

そのすつぱい冷たさが、ふと故郷を思ひ出させた。裕を送つて来た母も今は故郷にゐない（「胡頹子盗人」）という行からは、お金では買えない貴重な思い出が胡頹子によって思い出されたことが読み取れるのだ。

胡頹子は人間によって造られた朝鮮飴より綺麗だ。その上、土工が借りたがっている五十銭を、きっぱりと断った女に、娘にはそのお金を上げてもいいという気持ちを生じさせた。お金と胡頹子とを比較すれば、人間の価値観が表れてくる。お金は生活にとって必要なものであるが、人と人との心の触れ合いはお金ではなく、自然なものであらうとというのが川端の気持ちではないだろうか。

### 三、小料理屋の女と炭焼きの娘

二人の特徴について見てみると、小料理屋の女について以下のようにまとめられるだろう。

- 1.母がいる。しかし今は故郷にいない。
- 2.小料理屋を経営しているが、商売はあまりよくない。
- 3.故郷を恋しく思っているが、帰れない。
- 4.社交的だ。
- 5.故郷を離れて村に住んでいる。
- 6.お金を無心することがある。

では、炭焼きの娘はどんな人物なのだろうか。

- 1.病気の父がいるが、母がいるかどうかは分からない。
- 2.炭焼きがうまくできない。父より下手だ。
- 3.貧乏で、病気の父を看護している。
- 4.純粹で、気配りがあり、大人びていて、正直で親孝行だ。
- 5.山（故郷と思われる）に住んでいる。
- 6.貧しいため、医者へのお礼も自然の物で補っている。

作品には小料理屋の女と炭焼き娘の顔、格好などの描写は全くなく、年齢、名前すらない、職業だけが書かれ、他は読者の想像に任せる形である。二人は貧乏という点では似ているが、娘は純粋な気持ちを持ち、片や水商売の女。二人は胡頹子によって出会い、胡頹子のみによって交流を持つ。次は二人の出会いの描写である。

娘は女の新しい銘仙の袷にすつかり驚いてしまつて、紅くなりながら  
すたすた立ち去つて行く。

女は自分の膝の広さの二倍半もある胡頹子の枝を見てすつかり驚いて  
しまつてゐる。

この描写は何を暗示しているのか。炭焼きの娘は女の新しい銘仙の袷を見て、母はこのような袷をずっと前からほしがっていたなど、ふと思い出したが、お金がないから買えないでいたものだったのが、突然目の前に表れて、何か言うのを忘れ、ただ驚いて顔が紅くなり、慌しく去って行ってしまったのかもしれない。あるいは、炭俵を背負って山を下りてきた炭焼きの娘は、郵便配達夫が配達したばかりの小包から出した新しい袷を着て縁側に座っていた小料理屋の女と出会った。炭俵を背負った娘の目に入ったのは女の新しい袷。娘にとっては、その着物がまぶしく見えて、圧倒されたのかもしれない。きれいな袷を見た娘は、炭俵を背負った自分の姿を娘心に気恥しく思い、早くきれいな袷を着ている小料理屋の女の前から立ち去りたかったのではないかと考えられる。

一方、小料理屋の女は胡頹子によって、故郷、そして母を思い出した。単なる植物として引き付けられたのではなく、故郷や母に対する思いなどを胸に抱き、一瞬懐かしく、哀しく、そして心を洗われたように清々しい気持ちを感じたのではないか。

娘は物(つまり袷)を見て驚き、女は自然のもの(ぐみ)を見て、驚く。物と自然は人間の生活に欠かせないものでありながら、これらから遠く離れ

たら、やはり恋しくなるであろう。そして、ここで娘と女との立場を互いに代えたとしても、二人は同じような人物像であっただろう。女も昔は、娘のように純粹で素直だったかもしれないし、将来、娘は客の男から金を引き出す小料理屋の女のような人物になってしまっていたかもしれない。

岩田光子は川端が描いた女性を「川端文学における女性像」において「(略) その女性像も、一方において聖処女的な女性、他方において非常に豊満な官能的な女性、という相反する両端のタイプに、同時にひかれる傾向をみた。」<sup>5</sup>と分析をしている。つまり、「胡頹子盗人」における小料理屋の女と炭焼きの娘は、川端文学の女性像の源流だと強く感じることができる。

26歳の川端が書いた「胡頹子盗人」で設定された女と娘は、川端は54歳の時に「童心と女心とは芸術と人生との泉である」(『婦人公論』「選の言葉」昭和28年4月)<sup>6</sup>とその心情を吐露し、一途に恋に陥っている音子(聖処女的な女性)とけい子(豊満な官能的な女性)の女主人公二人を登場させた『美しさと哀しみと』(「婦人公論」昭和36年1月—昭和38年10月)でも、当時62歳になった川端の心情は余り変らない<sup>7</sup>。同性愛に陥った音子とけい子とのタイプは炭焼きの娘と小料理屋の女と似ているのではないのかと考えさせられる。

#### 四、「胡頹子盗人」という題名

「胡頹子盗人」は既述のように前半と後半が二つの話から構成されたものであるが、何故、後半の炭焼き娘の節だけが題名として付けられているのか、これについて川端の心情を想像してみたい。

前半では生活に迫られて、お金がほしい場면을クライマックスとして見

<sup>5</sup> 岩田光子(1983年10月)『川端文学における女性像』「川端文学の諸相——近代の幽艶——」p104 桜楓社。

<sup>6</sup> 『川端康成全集』第34巻に収録。p604。

<sup>7</sup> 詳しい論説は「『美しさと哀しみと』における音子の愛の行方」にある。張月環(2008)。「川端康成 追い求める愛と美」p124 致良出版社。

せていて、小料理屋の女は配達夫から五十銭の金を引き出させるが、二階に居る土工がこの金を見て、「ねえさん、その五十銭借りた。」と言って、「何いやがんだい。飴小僧。」と女は怒った。このように既述の郵便配達夫との会話を含み、前半は殆どお金が絡んだものとなっている。

後半では炭焼き娘が炭俵を背負い、胡頹子の大きな枝を担いで山を下りて来る。誰でも胡頹子を見て心を引き付けられる。前の第一節くお金と胡頹子に既述のように、娘のにこにこ笑うという描写は二回あった。そしてその後、縁側にいた小料理屋の女も胡頹子に興味を持って、娘に話しかけるといいう出会いがあつて繋がりが生まれた。

決して裕福でなく、貧しい生活環境の中で生きている二人。小料理屋の女は、男を相手に苦勞しながら生きてきたのだろう。男達との会話では、つっぱった感じが出ている。しかし、炭焼きの娘との会話では優しさを感じる会話となっている。そして、文末に女は「銀貨を紙に包み、静かに坐ったまま炭焼き娘の帰り路を待つてゐる」という女の優しさが、この場面では表れている。

小料理屋の女、炭焼きの娘、小学校の女の子、皆胡頹子によって、喜びを感じている。炭焼きの娘は、胡頹子を盗んだのではなく、人の心を盗んだのではないか。それで川端は「胡頹子盗人」という題名を付けたのではないかと思われる。鬼ヶ島征伐から帰った桃太郎のように、娘も大勝利を収めたのである。

## 五、終わりに

「胡頹子盗人」の結末では、小学校の女の子が歌ひながら、山路を帰つて行く。

風さやさやと

秋を吹く

この作品の頭に使われ、また最後にも使われて閉じられる。お金より自然からもたらされる喜びは、そこには人間の優しさ（小料理屋の女は母に対しての思い出、炭焼きの娘は父に対する看護も含む）、純粹さを引き出す。

作品の中に盛り込まれている、やまざと（山里）の、うるしの木の紅葉、珊瑚樹、柿、ぐみなどの秋の自然が満ち溢れた表現や、日常生活を通して季節感やのどかな雰囲気などを醸し出し、娘が胡頹子を医者にお礼の形で渡そうとするのと同じように、川端もペンを執って生きていること、すべてに「有難う」というような心情でこの作品を書いていると思う。これらが川端が『独影自命』で述べたいくらか牧歌的ということではないだろうか。

河上徹太郎は「川端文学の故郷」で、「大正十四年作の『有難う』や『胡頹子盗人』は全篇中最も美しいものだが、そこでは風物描写や人間の運命の哀感が勝つてゐる（略）」<sup>8</sup>と記している。この論説は半世紀を亘ってもいまだに深く味わうことができる。自然、世間の人情味をすべて有難く感じながら生きてゆくことが「胡頹子盗人」で示されており、それが何故「胡頹子盗人」と「有難う」における作品の冒頭と文末の表現描写が一致するのかという問いに対する答えであると同時に、川端の意思なのであろう。

---

<sup>8</sup> 河上徹太郎（1960年9月）「川端文学の故郷」『川端康成全集』月報8 新潮社 ここでは川端文学研究会編著（1977年3月）『詩魂の源流 掌の小説』p260 教育出版センター林武志「『掌の小説』研究の現階段」Ⅱ各論を参照。

## 参考文献

- 川端康成学会編（2013）『川端文学への視界』年報 28。
- Kawabata Yasunari Association (2013). *Kawabata Literature's perspective*, 28.
- 小谷野牧 深澤晴美（2016）『川端康成詳細年譜』勉誠出版社
- Koyano Atusi, & Hukasawa Harumi (2016). *Kawabata Yasunari's detailed chronicle*, Bensei publishing company.
- 田村充正 馬場重行 原善編著（1999）『川端文への世界』「その生成・発展・深化・背景」シリーズ五冊 勉誠出版社
- Tamura Mitumasa, Baba Sigeyuki, & Hara Zen (1999). *The word of Kawabata Literature - generate, develop, deepen, background. A series of five volumes.* Bensei publishing company.
- 仁平政人（2011）『川端康成の方法——二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成——』東北大学出版社
- Nihei Masahito (2011). *Kawabata Yasunari's method - 20th century modernism and Japan's construction of opinion*, Touhoku University publishing company.
- 長谷川泉（1984）『川端康成論考』増補三訂版 明治書院
- Hasewa Izumi (1984). *The study of Kawabata Yasunari* (3<sup>rd</sup> ed.). Meiji publishing company.
- 羽鳥徹哉（1979）『作家川端の基底』教育出版センター
- Hatori Tetuya (1979). *The basis of Kawabata Yasunari*. Education publishing center.
- 羽鳥徹哉（2001）「掌の小説について」川端文学研究会編『論集川端康成——掌の小説』おうふう
- Hatori Tetuya (2001). *On palm-of-the-hand stories. Kawabata's literature Research Society. About palm-of-the-hand stories - Kawabata Yasunari's Essays.* Oufu publishing company.
- 羽鳥徹哉（2006）『作家の魂 日本の近代文学』勉誠出版社
- Hatori Tetuya (2006). *The writer's soul - Japan's modern literature.* Bensei

publishing company.

松坂俊夫 (1983) 『川端康成「掌の小説」の研究』教育出版センター

Matusaka Tosio (1983). *The study of Kawabata Yasunar's palm-of-the-hand stories.*

Education publishing center.

森晴雄 (1997、2000、2003、2007) シリーズ五冊『川端康成「掌の小説」論』

龍書房 [Mori Haruo (1997, 2000, 2003, 2007)].

*Research of Kawabata Yasunari's palm-of-the-hand stories.* A series of five volumes.

Ryu publishing company.

## 付記

本稿は「2014年度、東アジア日本語教育・日本文化研究会が主催された国際学術発表会（8月24日、於台湾・崑山科技大学）」における口頭発表をもとにまとめたものである。なお、本論文を執筆にあたり、鈴木幸枝様、枝厚様、陳君慧先生にご指導賜ったことを厚くお礼申し上げます。